

〔翻刻〕 白百合女子大蔵 『いづみの抄 上』 (『和泉が城 上』)

佐藤 信一 世良 梓
武知 美樹 隅田 有美

前稿^{注1}に引き続き、本学所蔵の奈良絵本の中から「いづみの抄 上」を翻刻の形で紹介する。ただ、本学附属図書館は、外題から書名を「いづみの抄」とするが、これは明らかに「和泉が城」の誤りであろう。「いづみの抄」は、『国書総目録』にも記載を見ない。

本学図書館蔵の「いづみの抄 上」であるが、島津久基氏の『近古小説新纂 初輯』での翻刻^{注2}に於いて未詳とされる箇所はいくつかが本学の「いづみの抄 上」で解決する(一例を挙げると、『近古小説新纂 初輯』三七四頁四行目の「同じしう領はのぞみたるべし」とある箇所。この「同じし」は「マ、」とされ「う領」に「受領か」と注する。ただ、この場面を本学図書館蔵本でみると「おなしくしよりやうはのぞみたるへし」(「一八才八行目から九行目」とあり、『近古小説新纂 初輯』所収本を補えるものである)。このことから紹介する意義は十分にあると思われる。

【書誌】

写本。白百合女子大学附属図書館蔵。所蔵者整理書名「奈良

絵本 いづみの抄」整理番号九一二。二一九九一、外題「いづみしやう 上」、内題はナシ。刊写年時(含伝承)ナシ。残存は全。保存は汚。虫損アリ。帙。蔵書印、序跋、編著者等ナシ。奈良絵本。表紙は原、紺地金、水草文様。袋綴。見返しは原。巻数は二巻。料紙は楮紙。数量は二冊。寸法は縦一六。五糎、横二四。一糎、表紙以外の紙数、二二丁。遊紙はナシ。一面行数は二三行。絵は上巻六面。書き入れは墨による同筆のもの、漢字の読み方を示す。本文、平仮名。書き入れ、付訓も平仮名。

【凡例】

字配りは原本の通りに従った。

助動詞の「む」、「なむ」等は、原本で「ん」の字母である「无」が充てられていても、「む」で翻刻した。

明らかな仮名遣いの誤りのある場合は、訂正した文字をカッコで示した。

右傍に読み方を示す注記が見られる場合があるが、ルビで示した。

【翻刻】

いつみしやう上

さるあひたはうくはん殿た
かたちの御所にうつらせ給
ひきのふけふとは申せとも
三とせになるはほともなし
ひてひら入道いつきかし
つき申あふしう五十四ぐん
の大名小名みな此君に

おもひつき申ひはんたう

はんひまもなくいねうかつ
かうなかゝに申はかりは
なかりけり此事くはんとう
にかくれなしさる間かちはら
はちやくしのけんたかけ」
すゑしなんへいち（し）をちかつ

けさてもはうくはん殿あふ
しうへ御下向あり御せひを
申せは月にかさなり日に
まさることさら此君はたか
をのもんかく上人くらまの
とうくはうほうならのとつ
この御ほうにて御きやう

たいの御中なをし申
さんとの御ないたんときこ

(一オ)

ゆるかみは御きやうたいなれ
はつゐには御くわほうあるへ
しもしさもあらは判官」

殿つの國わたなへふくし
まにてのさかののいこんわ
すれ給ふへきさあらんに
をひてはわれゝよしとも

へひきいたされきられむ
事はちちやうなり

いかゝ

はせんと

申てつくゝ

あんし

わつらふ

はかり

なり」

〔絵〕

源太うけ給り仰のことくこの
君さいかまくらにましまさ
はわかいゑ大事たるへしさ
れはむかしかいまにいたるま
てちからにをよはぬかたきを
は神仏に申ならひの候
かなはぬまでもはうくわん殿
をてうふくめされて御らん

(二ウ)

(二オ)
(二ウ)

せよと申すかちはらけにも
と思ひやかてわかみやのへつ
たうそうしやうに参り

はうくはんとのをてうふく

すへきよしをひとへにたのみ」

たてまつる女房むすひやう正かたく

したいありけれとも一めいに

かけてたのみ申あひたち

からをよはすりやうしやうし

吉きちえらみ給ひて一所を

きよめしやうこんし四めん

のたんをかさつててうふく

のごまをそたかれけるそもく

しゆそのたんと申すはそく

さいそうやくけいあひてう

ふくとて以上たんは四たんなり

そくさいのたんはひかしむひて

をこなはるそうやくはみなみむ」

きけいあひはにしむきさて

てうふくはきたへむいてをこ

なはるくもつのやうにてお

そろしけれにうもくに山う

つきせうかうにはとくしやの

ほねくこにはひへしのいひ
をもりともし火にいもりの

(三オ)

あふら中にははくしやの水を

たれおんちき日々にかはつ

て一七日はちさうのほう二七

日はあみたのほう三七日になり

しかはとつてをしおとし

てないはくけはくのいんをむ」

すんでうすさま明王みやうおうこん

かうとうしのしんこんにて

かさねて七日いのりけり此つに

てかなはずは僧正そうじょうか命をめ

さるへしとつこをもつて

むねをたゝきさんこをもつ

てなつきをうちいたゝき

をうちやふりちやうじやうよ

りもあゆるちをこまの火へ

とつてかけいらたるしゆず

ををしもんでせめにせめて

そいのりけるあまりにつよく

せめられ西方さいほうにたち給ふ大」

いとくのめされたるちしやの

うしかわつとほえて北へむか

つてもろひさをつてふし

ければ行者ぎやうじや是こゝにちからを得

一しきんりん五たんの法

六しかりていはちもんしや

(四オ)

(四ウ)

不とうゑんめい大いとくみや
うわうないはくけはくに
さしかゝりせめにせめてそい
のりければ四七日のあけほ
のにたんのうへにくる雲
かかつてふとうのりけん
なまちかついていきくひたむ
よりころひをち
ししつと

(五才)

わらうて

うせければ

一ほうはしやう

しゆしたりとて

たんを

やふらせ

給ひ

けり」

〔絵〕

あらありかたや佛はくほう大しひ

とは申せともいのるしるしそあ

らはれけるしかれとも判官殿

にはおい給はてひてひら殿

のうへとなりてやまふのゆかに

ふし今をかきりとみゆるか

くてひてひら子を六人もち

(六才)

(五ウ)

て候かあにをはにしきとの
太郎二なんはたての二郎三なん
はいつみの三郎四郎もとよし
ひつめの太郎とて五人なん
しにてをとほ姫にて候ひ
ける今をかきりとみえし」
ときあにつきのものともを
あとやまくらにちかつけていか
にきやうたい物をきけそれ
ゆみとりのなきあとに一もん
きやうたいふあんなれば國家を
やふるなりあにはおとくをあ
はれむへしおとゝはあにゝ
したかふへし君をうやまひ
奉りたみをもふかくあはれむ
へしその外しんはいまつりこ
とひてひらかなきあとに
すこしもちかゆる事なけれ
いかにいつみのしゝらたかたち
殿へ参りきみを御供申

(六ウ)

(七才)

せそれかしさいこに申たき

しさいありたゝひらうけた

まはつていそきたかたち殿

に参り此よしかくと申あ

くるはうくはんおほきにをと

ろき給ふいせの三郎よしもり
かめいの六郎しけきよかれら
二人を御ともとしひてひらかた
ちにうつらせ給ふひてひら入
道なめによるこひて五人
の子ともにかいしやくせられお
きなをりてうつうかいしひた」
たれのかみはかりをちやくしを
のくいたいめん申只今我君
を申いるゝ事へちのしさいに
て候はずひてひらこそしやは
のえんつきはてめいとくはう
せんのたひにをもむき候子
ともあまた御座候へとも御めに
かゝりことくいつれもわかき
ものにて候ほとにおほそれ
なからきみをしやうにんにたて
まいらせしよりやうかわけたく
そんし候まつそりやうに
て候程にしきとの太郎に」
そりやうを申つけたくは候
へとも君御そんしのことくひて
ひらかしそんにをひてちやくし
にそりやうをもたする事
の候はねは家のそりやうを

(七ウ)

はたての次郎やすひらに申
つけ候間とうかいたうにと
つてはたてのこほりしのふのこ
ほり十五くんの所はそり
やうしきにて候ほとにたて
の次郎やすひらにとらせ候
さいかいたうにとつてはかつたの
ほりしはたのこほりとかひあ」
つせかれこれ十五くんの所を
はにしきとの太郎にとら
せ候まつしま七くんをはいつ
みの二郎にとらす也しほか
ま六くんをは四郎もとよし
にとらすへしひつめのこほ
りをはすゑのくはんしやにとら
するなりたけくまさいかいふん
こほりをはおとの姫にとら
するなりかたたのこほりをは
こけふんに参らすまき又
てはは十二くん小國にては候へ
とも我きみにたてまつる」
御馬ごまの草かひ所ともおほし
めされ候へしあらなこりお
しの我君やきみのかくて御
座まある事御ほんいにてはあら

(八ウ)

(八オ)

(九オ)

ねとも世にしたかへはくるし
からすひてひらむなしくなる
ならばかまくらよりもわかき
みをうつて参らせよとたはかり
御判けだまかくたるへしそれをまこ
とに心えてきみにふちうを
いたすならば神りよのにく
まれかうむつてひてひらかし
そんなへぬへしなとてか世の中」
の思ふやうにはあらさらむ
御きやうたいの御中なをり
さいかまくらの御ともをも申さ
はやと思ひしに只今むなし
くなる事よこれのみ心にかゝ
るとてふかくのなみたなかし
けり子ともうけたまはつて
御心やすくおほしめせきみ
にまつたう二心あるましき
よしを申すひてひら聞て
あらうれしや其儀にて
あるならはいまたこんしやうな
いきのかようとときしやうを」
かいて我にみせよきやうた
いうけたまはつてやすき間
の御事と松嶋大明神の

(九ウ)

こわうを申をろしあに
にしきとをさきとしをかく
きしやうをかいりけるそも
くきしやうものいしゆは
八幡太郎義家よしげこの國に
御下向あつてあべのさた
とうをせめほろほし我に
かせんそみたちの権太郎
きよひらに此國のしやこ
をたまはつしより此かた」
其子に小次郎もとひら
今ひてひらまで三代は國
をたやかにおさまりかたし
けなくも一天の君のせんし
をかうむりゆみやの家の名
をえし事しかしなから
当家とうけのおんたりなんそ
此きみの御おんにひとしか
らすや是をいはひ申さは
かみはほんてんたいしやく
しもはしたい天生けかいの地に
は伊勢天照太神をはしめ
参りしにうしやうのちん」
しゆ八幡大ぼさつかしまかん
とりすはあつたへつしては

(一〇ウ)

(二〇オ)

(二一オ)

氏のしん松しま大明神

そうして六十六カ國の大

小の神祇みやうたうをおと

ろかしたる所此君に二心

あるならばひてひらかしそ

むたへはて今生にてはゆみや

のみやうかなかくすたり來世

にてはならくにしつみ

くれん大くれんのこほりに

とちられうかむ世さらに候ま

しきしやうもんくだんの」

のことし文治四年二月

廿三日にしきとの

よりひらはんと

かきければ

つぎをとくも

きしやうをかき

をのく

はんを

すゑたるは

さて身のけも

よたつ

はかり也」

〈繪〉
ひてひらは是を見てきしやう

(二一ウ)

のをむきしんへうなりまつ

そうりやうやすひらかきしや

うをは氏神松嶋大明神

のほうてんにおさむへし

にしきとかきしやうをは我君

にたてまつれいつみの三郎

かきしやうをは入道かめいと

せうこにもつへしとてはた

のまもりにかげにけりのこる

二人かきしやうをはいにやい

てなんちらか五たいにし

つかとをさめよ承り候とて」

はいにやいて水にいれきやう

たい五人のもの共かしたひく

のみたりしはためしすくなき

したひなりひてひらはをみ

て今は心やすくはそれ人のし

するにはまつこの一句と申

す事の候それかしか一くには

いくさのやうを申へしひてひ

らむなしくなるならばさた

めて鎌倉殿よりも判官殿

うつて参らせよとたはかり御

はんにしきとかたちにつく
へし一度のつかひに返事を」

(二三オ)

(二二オ)
(二二ウ)

(二三ウ)

申すな二度のししやうをは
うつてすてに三度にもふる
ならはかまくらせいかたつへし
うつてむかふとふうふんせは
くんひやうともをあひふれ
てたての大木戸おほきときりふた
きかめはりさかにせきをすゑ
五人の子共は大將おほしやうにてさいたう
の弁慶をいくさ奉行べんけいにさた
めてめさましいくさせさすへ
しくんひやうつくるものなら
はたかたち庭に火をかけたつ
こくかいはやかきりやまかせんし」
やうへ君をうつし奉りきやう
たい五人のものとはせんほく
かなさは鳥のうみかつたむら
たあいだのせう四十八のじや
うくはくにをつとりこもつて
五年も十年もふせきたゝ
かふ物ならはかまくらせいのな
がちんはおもひもよらぬ事
にてありさあらはしこくう
つつて御兄弟ごあなにいの御中ごちゆうつゐ
にはなをり給ふへしもし
さもあらはなんちらは九郎に

(二四オ)

ちうあるさふらひとてくわんと」
うへめしいたされくんかうけ
しやうにあつかるへしたとひ
ひてひらしゝたりともくさの
かけにてそれかしかくろかねの
たてとなつてまもるへきそや
子ともとてさもかうせうには
の給へともしたひくによはり
ければ君をはしめて子とも
共みななみたをそなかしける
なをく申たき事とへとも
あまりにくたひれしほとに
しはらくやすみ申さむと是を
さいこのこと葉にて文治四年」
十二月四日のあけほのに九十
八と申すにはあしたのつゆと
きゑにける子とも一もんあ
つまりてなげくも中く申
もをろかなりことさらな
けかせ給ひしはたかたち
殿にてとゝめたりくはほう
なのよしつねや二さいの春の
ころはなれ申せしちゝこそ
はまたようせうの事なれば
夢ともさらにわきまへす

(二四ウ)

(二五オ)

今ひてひらにはなるゝ事

二しんにをくるゝ思ひかなよし」

つねこそ世にあらは

いかなるおんをも

あたふへきに

あまつさへ

は

ひてひらに

ゆつり侍るこそ

はつかしけれなにと

なりゆくき身そと

りうていこかれ

給ひ

ける」

〈給〉

たゝとにかくにおんにしく

はあらしとて御いろをめされ

て野へまでをくらせ給ひける

たゝよしつねのくはほうのつ

くるゆへとそきこへける去間

七日くをは子共うけとり

思ひくにとそふらひける

三十五日にあたる日はえんま

のちやうへ来る日なればよし

つねといへとおほせあつて

(二五ウ)

(二六オ)

(二六ウ)

みつから御きやうあそはしか
すの御僧くやうしさま

くくの御とふらひなり草の」

かけなるひてひらもさこそ

よるこひ給ふらむ百か日に

あたる日は松嶋の別當べつどうをしや

うし申一七日の御かうたん

あり叔もひてひら申せしこ

とくあんにもたかはす百か

日もすきけるに鎌倉かまくら殿とのよ

りも判官はんくわんうつて参らせよ

とたはかり御はんにしきと

とかたちにつくにしきとか

中のていにてきやうたい五人の

ものともひらいてはいけん仕

其状そのじやうにいはいく何とてをくの」

一たうは世になきよしつねと一

身しよりもにてきをなす

てういはれなしはやあくしん

をひるかへし義經よしむねかかうべを

きつてくはんとうへさゝくるなら

はけしやうにはかうつけしも

つけかいしなのむさしと五か

國をあておこなふおなし

しよりやうはのそみたるへしよ

(二七オ)

(二七ウ)

つて状じやうくだんのことしふんぢ
五年三月一日みなもとの頼朝
判とそよみたりける兄弟まごだいらい是
を承はつて仰のことく世にも
御座なきよしつねを主しゆとたの
み申せはおりましき所にて
馬よりをるゝむねん也いさ此君
をうちまいらせかうつけしも
つけかいしなのむさし五か國を
五人して知行ちぎやうせむと申各
義ぎにとうしける其中に三
男おとこいつみの三郎たゝひらゑ
ほしのさきをちにつけなみ
たをなかし申すやう」
〔繪〕

(二八才)

(二八ウ)
(二九才)

たいめん申ましとさしき
をたちて歸かへりしをほめぬ人
こそなかりけれそのゝちいつみ
の三良〔郎〕わかやとにかへり女房
をちかつけて扱もめんほく
もなき事の候それをいかに
と申にきやうたいの人ゝのは
やてきとならせ給ひ君を
うち申さむするたくみの候
なんほうあさましきした
ひにては召ぬや女房聞てあ
らあさましの御事やさふ
らふひてひら殿にをくれ
させ給ひていく程もなき間
にきやうたいの人ゝのてきと
なり給ひなは扱我君何と」
ならせ給ふへきみつから女の身
にてさふらふ共たかたち殿へ
参り君の御供申へしさて
たゝひらは何と思ひ給ふそや
いつみ此よしきくよりもさ
らくへちのしさいも候はず
さためてきやうたいの人ゝの
心中には今夜たかたち殿へ
こそうちよする事も候へし

(二九ウ)

(二〇才)

いそきみつきせいを参らせむ
とてくつきやうのつはものを
廿七騎きすくつてたかたち殿へ
参らして我身はたゝうちと」
ふてさいこをしらぬそあはれ
なるさてもにしきとかたち

(二〇ウ)

にはのこる四人の人ゝさもあれ
いつみの三郎は我ゝをせいし
かねさしきをけたてゝたつたる
物かなしこくうつしてかなふ
ましまついつみにはらをき
らせ九万八千のいくさ神かみのち
まつりにせむもつとし
かるへしとててるいかなざは鳥
のうみに三千騎きあひそゑい
つみか城しやうへとよせたりけるかの
いつみかじやうと申すは三方はうは「
衣河えがわ」一方はほりをほりみる
もきをひきようしんきひし
かりけれともけにはよとてはあ
ないしや又はにはかの事なれば
一二の木戸きとへをしよせときを
とつとあくるしやうのつは
もの思ひよりなき事なれ
ともわれもくときつて出か

(二一オ)

うみやうをせむとふせき
たゝかふたり」

〔絵〕

(二二ウ)
(二二オ)

なお、この「いづみの抄 上」は、白百合女子大学図書館ホームページ上で、今回作成した翻刻、及びそれをもとに作成した釈文とともに公開されている。貴重書画像のURLは http://schl.shirayuri.ac.jp/rare_books/rare_books.html である。図書館のトップページに「貴重書画像」というリンクボタンがあり、そこからアクセスすることも出来る。大方の叱正を請いたい。

この翻刻を作成するにあたって、平成十八年度白百合女子大学研究奨励費の助成をうけたことを言い添えておく。

注1

- 「〔翻刻〕」〔白百合女子大学蔵〕うらしま」「白百合女子大学研究紀要」三八号（平成十四年十二月刊）、
- 「〔翻刻〕」〔白百合女子大学蔵〕「小おとこ」〔言語・文学研究論集〕三号（平成十五年三月刊）、〔翻刻〕
- 〔白百合女子大学蔵〕奈良絵本「七草」、「ざざれ石」、
- 「いさよひ」〔国文白百合〕三四号（平成十五年三月刊）、〔翻刻〕〔白百合女子大学蔵〕「釈迎の本地」
- 〔言語・文学研究論集〕四号（平成十六年三月刊）、
- 「〔翻刻〕」〔白百合女子大学蔵〕奈良絵本「うばかわ」
- 〔国文白百合〕三六号（平成十七年三月刊）。

2

伊東玉美氏の示教による。

3

「近古小説新纂 初輯」(昭和3年4月中興館刊)。
(本学教授〔佐藤〕本学大学院学生〔世良・武知・隅田〕)